

久松山の調査について

西 尾 孝 昌

1 はじめに

久松山に広がる国指定史跡鳥取城跡の全山の分布調査に着手し、平成19年11月から平成20年3月にかけて実施した。本稿では、久松山に存在する中近世城郭遺構の調査の中間報告を行う。

調査は、城郭の縄張り図作成を主な目的とした全山分布調査であり、それに伴って城郭遺構の表面観察を行った。そして曲輪・堀切・土塁・竪堀・石垣などの城郭遺構を確認した。調査方法は、巻尺・クリノメーターなどで規模を計測してその形状を作図した。

本年度は、鳥取城跡の国指定史跡範囲の大部分を調査した。調査の地点ごとに区分して報告する（第1図）。

久松山鳥取城では、1)「山上ノ丸」（本丸・二の丸・三の丸、2)「山上ノ丸」南側斜面（「中坂」）の「段状遺構」周辺部の遺構、4)「山上ノ丸」西側（北西～南西斜面＝「西坂」）の遺構、5)「山上ノ丸」北側斜面の遺構、6)大規模な竪堀遺構などを報告する。

また久松山東地域にある寺屋敷・陣城跡を3)「寺屋敷」周辺部の遺構で報告し、久松山北西地域にある陣城を7)「北側堀切」以西の城跡群の遺構として、雁金山城跡、道祖神の上城跡、丸山城跡、（伝）羽柴秀長の陣跡を報告する。

なお調査者は、鳥取市教育委員会文化財課（佐々木孝文・坂田邦彦）と筆者である。

2 城郭遺構の調査結果

1)「山上ノ丸」（本丸・二の丸・三の丸）周辺部の遺構（第2図）

< 本丸の遺構 >

本丸は東西約78m・南北約35mを測り、総石垣で普請されている。

天守台（23.5×20m以上？本丸からの高さ3.8m）は北・西側の石垣が破壊されており（破城か）、規模を正確に計測することは出来ない。天守台の南側と西側に石垣の切れ目（隅角部）が見られ、数回の改修が想定される。特に、西側（高石垣）の改修は特異で、2つの櫓台状の高石垣の間に石垣を無造作に放り込んだような形状をしている（写真1）。

写真1



この遺構は、以前存在した本丸搦手虎口を天守台改修時に塞いだ結果であるのかも知れない。石垣（転石を含む）には規模の異なる各種の矢穴が見られ、普請の時期差を考える資料となろう。また、天守台の東側の基壇状の石組（14.2×6.8m）は、付櫓遺構と思われる。

本丸の虎口は現段階で2カ所ある。東側の大手虎口は13段の階段状の平虎口（幅5.6m）

で、中程に踊り場（城門＝渡り櫓）をもつ。その左右は櫓台であろうが、石垣の隅角部を中心にかなり破壊されている（破城か）。南側の搦手虎口（幅 3.7m）は石段の坂虎口であるが、正面（城下町側）に搦手を設けるのは不自然である。最初の本丸普請以降に、構築した可能性が高い（搦手虎口は天守台北側か、天守台西側の石垣切目の箇所が存在したのではなかろうか）。

本丸はほぼ方形の形をしていて、石垣の墨線は直線的である。「横矢掛かり」は北側に 1 カ所、南側に 3 カ所見られるものの、幅 0.5m 程度と小規模である。本丸石垣の高さは西側（天守台側）は高石垣であるが、北側（裏側）は約 6m、南側（表側）は約 3m とかなり低い。尚石垣調査中に、南側斜面に「横矢掛かり」とセットになった石段を発見した。古い虎口を石垣で塞いだものであろう（写真 2）。

写真 2



< 本丸西の曲輪・南下の曲輪遺構 >

本丸西曲輪（仮称「西の丸」）・南下曲輪（仮称「南出丸」）の石垣には新旧の遺構がみられる。例えば、「南出丸」は全体が岩盤の上に構築されているが、明らかに西側の高石垣（高さ 5.5m）は古い石垣を改修したものである。「西の丸」も同様に、天守台側の曲輪裾部の壁状の石垣は古く、「西坂」側の高石垣は新しい。

< 二の丸・三の丸 >

二の丸（東西約 20.6m・南北約 35.5m）も墨線が直線的な総石垣であったと思われる

が、東側と南西側の石垣が破壊されている（破城か）。三の丸へ下りる搦手虎口は、現在の破壊道？と同じ位置かどうかは明らかではない。

三の丸（約 20 × 30m）も方形な総石垣であったものと思われるが、石垣が殆ど破壊されているようである。現状では虎口は明らかではない。

< 「山上ノ丸」の北斜面の段状遺構 >

本丸北斜面の中で、西側の尾根には 4 カ所に段状遺構が認められる。ここで多くの岩盤が露出しており、その中の 2 カ所で、岩盤から切り離した石材に矢穴痕を確認した。これも、南側斜面（中坂）同様の段状遺構であり、鳥取城の石垣普請に利用した石取場と考えられる。

< 三の丸東下と「十神砦」の虎口 >

三の丸の東下の曲輪（「東坂の上」）に普請された虎口（城門 A）は、短い石塁と 2 段からなる「登り石垣」の間を一折れで入る階段をもつ坂虎口である。石塁は 3.2 × 7.1m、「登り石垣」はそれぞれ下が 3.4 × 5.6m、上が 3.5 × 12.1m を測る。

「十神砦」に普請された虎口（城門 B）は、2 段からなる「登り石垣」と長い石塁からなる外柵形虎口（幅 4.7m）である。「登り石垣」（高さ 2.8 ～ 8m）はそれぞれ、4.7 × 10.8m、5.0 × 10.0m を測る。石塁（高さ 1.5m）は折れを持ち、4.7 × 25.8m を測る。

城門 A・B は平入り虎口と外柵形虎口の違いはあるものの、「登り石垣」と石塁で構成されており、同じ様式の虎口と考えられる。「登り石垣」と石塁を使用した虎口は文禄慶長期の倭城に多用された縄張りであり、虎口 A・B は文禄慶長期の宮部長熙によって普請されたものと思われる。また、遺構の石垣はかなり崩れており、人為的な破壊（破城）が想定される。尚、「十神砦」の虎口石垣にも、矢穴痕が認められる。

2) 「山上ノ丸」南側斜面（「中坂」）の「段状遺構」（第 3 図）

段状遺構は通常の城郭曲輪と様相を異にし、尾根部に造られてはいるが、幅が狭く横に長い形状の削平地である。大きい平地で9.3×59.0m、小さいもので4.0×13mを測る。平地には随所に岩盤が分布し、石を切り出したような痕跡が認められる。特に、岩盤の数カ所には矢穴痕があり、また平地の転石にも多くの矢穴痕がある（矢穴痕の写真3）。

写真3



段状遺構は40カ所程度分布し、それぞれに連絡道があるようである。また段状遺構付近の谷部には、石を上下に運搬したと思われる縦堀状の跡も認められる。

このような遺構のあり方から考えて、時期は明らかではないが、この段状遺構は城郭曲輪ではなくして、鳥取城の山上ノ丸及び山下の丸築城に関連する石取場と判断される。

3) 「寺屋敷」周辺部の遺構（第4図）

<「寺屋敷」の遺構>

通称「寺屋敷」は、北・西・東の三方の尾根に囲まれた谷部に存在する。最上部の平地は細長く、東西約80.0m・南北約26.8mを測る。そこから直線的に通路と思われる幅広い溝が谷方向に延びている。そして通路の左右には、かなりしっかりとした広い平地（規模の大きいもので、35.5×22.5m）が10箇所ほど造られている。

このような様相は、滋賀県などに見られる真言・天台宗などの中世寺院（百済寺・金剛輪寺など）のあり方と酷似している。中世寺

院の遺構配置の特徴は、最上部の平地に本堂を設け、そこから直線的に延びる参道の左右に階段状に坊舎を配置する形である。

「寺屋敷」の平地配置は城郭の曲輪配置とは異なり、このような中世寺院の形を示している。しかし最上部の平地に、本堂跡特有の基壇はなく、参道が「一折れ」の虎口状を呈してはいる。戦国期に近畿地方で一般的にみられる坊舎を囲い込むような土塁が無いことなどを考えると、戦国期以前の15世紀に遡る中世寺院として、この「寺屋敷」が最初に造られた可能性が高い。

尚、調査中に最上部の平地で、池田家の家紋を入れた揚羽蝶の軒丸瓦の破片を採集した。江戸期にこの「寺屋敷」が利用されたことを示す、貴重な資料である。

<陣城（付城）遺構>

「寺屋敷」の東側に連続して、元来「寺屋敷」の一部であったと思われる平地（ひょうたん池の西）が、大規模な縦堀と横堀によって囲繞された城郭遺構がある。中心となる曲輪は1つであるが大きく、東西約40m・南北約32mを測る。曲輪の内部は数区画に分けられてはいるが、あまり段差はない。

この曲輪の北側に、大規模な折れをもつ横堀が掘削されている。その規模は、幅8～10m・深さ5～6mを測る。横堀北側の土塁は、幅11m・高さ1.5m・長さ20mを測る。

また、曲輪の南側には2条の縦堀が掘削されているが、これも大規模なもので、幅約14～15m、深さ6～8m、長さ35～44.5mを測る。

この遺構は、明らかに、「寺屋敷」の坊の一角が横堀・縦堀・土塁などで改修されたものである。遺構のあり方から判断すると、ひょうたん池築造以後の構築である。この遺構は横堀や縦堀の使い方からして、織豊勢力の陣城（付城）と推定する（最終判断は、「太閤ヶ平」を中心とした陣城群の縄張り調査の結果によるが）。尚、「寺屋敷」西側の縦堀はこの陣城に伴うものと思われ、横堀と縦堀で囲繞した曲輪だけでなく、「寺屋敷」全体

を陣城として利用するために構築したものと判断される。

4) 「山上ノ丸」西側（北西～南西斜面＝「西坂」）の遺構

西側斜面の主尾根（「西坂」）は、「西の丸」から「鐘ヶ平」・「松の丸」を経て山麓（県立博物館北の砦）に至るルートである。この尾根筋に、規模の大きな曲輪が集中する。

「鐘ヶ平」は東西約 28.8m・南北約 24.2m を測り、曲輪の北側と南側に裏込石の無い石積みが見られる。また、曲輪の南側には幅約 8m を測る大規模な縦堀が構築されており、縦堀は「太鼓ヶ平」東側の谷を経て山裾まで続く。

「鐘ヶ平」の南尾根には、「太鼓ヶ平」（20 × 6.3m、13.3 × 10m）を初めとして 12 段程度の小曲輪群がある。また「鐘ヶ平」から南西に延びる尾根には、急斜面に 7 段程度の小曲輪群（8 × 4m など）が構築されているが、やはり古い遺構と判断される。このような小曲輪群は戦国期の遺構というよりは、山名豊国の鳥取城入部以前（南北朝～室町初期）の遺構と思われる。

尚、「太鼓ヶ平」の西側斜面には縦堀（幅 4m・長さ 15m）が構築されているが、この縦堀が、山下の二の丸「登り石垣」方向に延びるか否かは未確認である。

「鐘ヶ平」から「松の丸」へ至る途中には、中規模で切岸のしっかりとした 4 段の曲輪群（17 × 8m、17.7 × 16m、13.6 × 6m、19.7 × 7.5m）がある。

「松の丸」は 4 段程で構成されているが、その中心は東西約 35m・南北約 39m を測る大規模な曲輪とその西に連続する石垣を持つ細長い曲輪（24.5 × 9m）である。石垣をもつ曲輪の北側と西側は高さ 2～2.5m 程度の長い石垣が積まれ、曲輪北西には隅角部も遺存している。曲輪南側の縁は破壊されたような痕跡があり、1 石程度の石列のみが遺存している。この石垣を持つ曲輪は、隅角部が遺存していない南西隅からストレートに入

る「虎口曲輪」であり、しかも総石垣であったものと判断される。しかし、隅角部を初めとして「破城」を受けているように思われる。石垣の構築時期は、石垣が 2m 程度と低い、算木積が未発達、石垣がかなり寝ている、などから判断すると、天正期の宮部（継潤）段階ではなかろうか（写真 4）。

主尾根山裾（県立博物館北側）の曲輪群は 5 段で構成されており、切岸が高く、しっかりとした規模の大きな曲輪（28.3 × 13m、23 × 11m、22.5 × 17.2m、55 × 7m、16 × 11.5m）を構築している。「山下の丸」の西端を守備するための「砦」として、構築されたものと思われる。

「西の丸」北西尾根には、2 カ所に小曲輪群が構築されている。上段の曲輪群は 2 段で構成されているが、曲輪群前面に堀切（幅 7m、深さ 8m）・縦堀（幅 3.5m、長さ 11～12m）を構築している。「堀切・縦堀」遺構は鳥取城の城域で唯一である。

下段の曲輪群は 9 段程度で構成されており、中心曲輪（10 × 23.4m）を帯曲輪群が取巻くような形となっており、堀切・土塁・縦堀などは無い。戦国期以前の「村の城」的な様相を呈している。

写真 4



5) 「山上ノ丸」北側斜面の遺構

北側斜面には西（段状遺構の尾根、「千人返し」）と東の 2 つの尾根が存在する。

西尾根（「千人返し」）には 6 段の小曲輪群が点在する。中でも鞍部の堀切（幅 7.2m、

深さ 2.5m) 近くの、古墳を再利用した 2 つの曲輪 (12.3 × 9.2m、17 × 12m) はしっかりしている。前述した西尾根の主要な段状遺構は、42.6 × 8m、23.4 × 8.2m を測る 2 段である。それぞれの曲輪の転石に矢穴痕が認められる。

本丸直下の東尾根には、切岸のしっかりとした、4 段の中規模な曲輪 (27.5 × 11.5m、14.2 × 11.5m、25 × 12m、12 × 6.5m) と谷部に井戸 (水の手) がある。さらに急斜面を下りた下の方に、中心曲輪 (11 × 19m) を 3 段程度の帯曲輪が取り囲むような遺構が存在するが、切岸が甘く、戦国期以前の古い遺構であろう。

北斜面は急崖であることもあって、曲輪の造成は顕著ではない。私見では、この北側斜面は城の裏側にあたる。また「狭義の鳥取城」の城域は、鞍部の堀切までであると思われる。

6) 大規模な豎堀遺構

山腹から山麓まで掘削された大規模な豎堀 (「大豎堀」) は、現段階では、①「天球丸」東側に 2 条、②登城路 (「中坂」) 近くに 1 条、③「鐘ヶ平」南斜面に 1 条、合計 4 条確認している。

「天球丸」東側の 2 条の大豎堀は大規模なもので、幅約 13 m・長さ 70 ～ 130m を測る。「鐘ヶ平」南斜面の大豎堀は幅 8 ～ 10m を測り、「太鼓ヶ平」の東横を通り「天球丸」西端の谷部に落ちているようである。「中坂」の大豎堀は、「本丸」直下から「天球丸」まで続いているようである。

何れの大豎堀も、鳥取城の「山下の丸」を直接防御するためのもので、「山上ノ丸」と「山下の丸」を一体化させるための防御施設であろう。他の豎堀は未確認である。

7) 「北側堀切」以西の城跡群の遺構

「北側堀切」以西の尾根には、各種の城郭が存在すると思われるが、今年度は丸山城・(伝)羽柴秀長の陣跡 (仮称)・雁金山城・道祖神の上城の 4 城のみの調査にとどまった。

「北側堀切」から丸山城までの城砦群については、総ての踏査結果をみてその評価をしなければならないが、とりあえず 4 城郭の縄張りの特徴について、簡単に報告する。

< 道祖神の上城跡 > (鳥取市東町) (第 5 図)

標高 147m の主郭 (7.7 × 10.8m) の東側に 3 段、西側に 7 段の小規模な曲輪を連郭式に配置し、その直線的な曲輪群を幅の狭い (3 ～ 4m) 帯曲輪が取り囲むように構築されている。土塁は高さ 0.5 ～ 1m 程度のものであるが、何れも東側の鳥取城方面を向いているのが特徴的である。堀切や豎堀は見られない。この城は丸山城から鳥取城へ至る尾根筋にあたり、天正 8 ～ 9 年頃毛利方の物資補給のための「繋ぎの城」であったと思われるが、丸山方面から進攻した秀長軍によって、土塁を中心にして改修されたのではなかろうか。

尚、この城の南側のピーク (標高 139m) には城郭の曲輪かと思われる遺構があるが、何れも古墳である。しかし、「繋ぎの城」として古墳群を利用したことは十分考えられる。

< 雁金山城跡 > (鳥取市湯所町) (第 6 図)

「平和塔」から北西方向に約 170m ほど進んだ、標高 140m の山頂に所在する。主郭 (10.5 × 14.3m) から 4 方向に延びる尾根に小曲輪を配した城を、主郭を中心として、高い切岸 (5 ～ 10m) と帯曲輪で改修したものである。

在地系の「繋ぎの城」を、織豊勢力が一部分改修しているのかも知れない。

< 丸山城跡 > (鳥取市丸山町) (第 7 図)

丸山城は塩冶周防守や奈佐日本助が兵糧搬入に利用した、毛利方の最前線の城郭である。標高 85.3m に位置する山頂はかなり平坦で広い。主郭は東西約 61m・南北約 15m と細長く、現状で判断すると帯曲輪が巻いていたようである。主郭の南端に、幅 5.7m・長さ 20m・高さ 1m を測る鉤状の大規模な土塁がある。主郭周辺は弘法寺が建立され、遺構が改変が著しく、この土塁の在り方はよく分からない。

城の東端には、幅約 2m・高さ 0.5m を測

る土塁囲みの小曲輪（8.5 × 7m）がある。

主郭北尾根には、削り残し土塁を持つ 14 × 12.3m のかなりしっかりとした曲輪や堅堀を構築している。また主郭部から少し下がった南西尾根には、削平の甘い 5 段程度の曲輪を配置している。

城は大規模な土塁や帯曲輪などによって、主郭周辺が改修されている可能性が高く、やはり織豊勢力による改変が想定できる。

<（伝）羽柴秀次の陣跡>（鳥取市覚寺）（第 8 図）

山頂に設けられた主郭は方形で東西約 24m・南北約 22m を測り、幅 4.5 ～ 5m・高さ 0.9 ～ 1.2m の土塁で囲繞されている。東側と西側に虎口（幅 2.5 ～ 4.3m）が開く。さらに主郭の東西には、土塁囲みの東郭（18.5 × 19m）と西郭（17.5 × 12.6m）を構築し、東西の副郭を帯曲輪で連結している。土塁は東郭が幅 3 ～ 4.6m・高さ 1m、西郭が幅 2.5 ～ 5.2m・高さ 0.5 ～ 1.5m を測る。東郭から東に延びる尾根筋には、小曲輪群と削平の甘い平地が構築されているが、その性格は不明ながら陣城の一部と考えられる。

方形で土塁囲みの曲輪を連結し、虎口もしっかり設けた縄張りは、在地系のものではなく、織豊勢力の陣城特有の縄張りである。「太閤ヶ平」の陣城群はよく知られているが、鳥取城周辺にはこのような未確認の陣城がかなりあるのかも知れない。

3 まとめ

以上のように城郭遺構分布調査の結果を報告してきたが、若干の指摘を行って中間報告のまとめとしたい。

①本丸・二の丸・三の丸などの石垣や縄張りの基本は、宮部氏段階のものがほとんどで、池田氏段階に天守台・虎口・高石垣などを中心にして部分的に改修されたものではなかろうか。本丸の低い（4 ～ 6m）石垣・小さな横矢掛かり・改修以前の虎口などの存在、「出丸」「西の丸」「南出丸」など

の古い石垣の改修などは、そのことを物語っているようである。また、前述したようにかなりの石垣が随所で壊されており、今後「破城」が行われた可能性の是非についての検討が必要になってこよう。

②宮部氏段階の虎口は 3 カ所遺存している。「十神砦」と三の丸東下曲輪（「東坂の上」）の虎口は「登り石垣」と石塁を使用していることから、倭城タイプの虎口といえる。また、「松の丸」の虎口は平入りで石垣も低く、倭城以前の虎口だと思われる。宮部氏段階で、「山上ノ丸」だけでなく、「東坂」と「西坂」に虎口を設けることによって、鳥取城全体の防御強化を図っているといえる。

③「寺屋敷」で採集した揚羽蝶の家紋瓦は、江戸期に「寺屋敷」が利用されたことを示している。絵図などの検討によれば、「東坂」（「寺坂」）は城主などが登城する事実上の大手ルートであったようで、登城に関わる何らかの施設が設けられていたものと推察される。「寺屋敷」の始まりは 15 世紀に遡る可能性があり、天正元年以降は鳥取城の一部として利用され、さらに揚羽蝶瓦の発見によって江戸期にも建物が造られ、利用されたことが推定できる。

④今回、織豊勢力の陣城として「（伝）羽柴秀次の陣」と「寺屋敷の陣城」の 2 城を発見した。これらの陣城は在地の縄張りとは異なり、「太閤ヶ平」や三木城攻め・賤ヶ岳の戦いの陣城群などの縄張りとは酷似している。文献的にも天正 8 ～ 9 年織豊勢力が鳥取城攻めの陣城をいくつも構築したことが判明しているが、今後「太閤ヶ平」の陣城群だけでなく、鳥取城周辺の悉皆調査が不可欠となる。

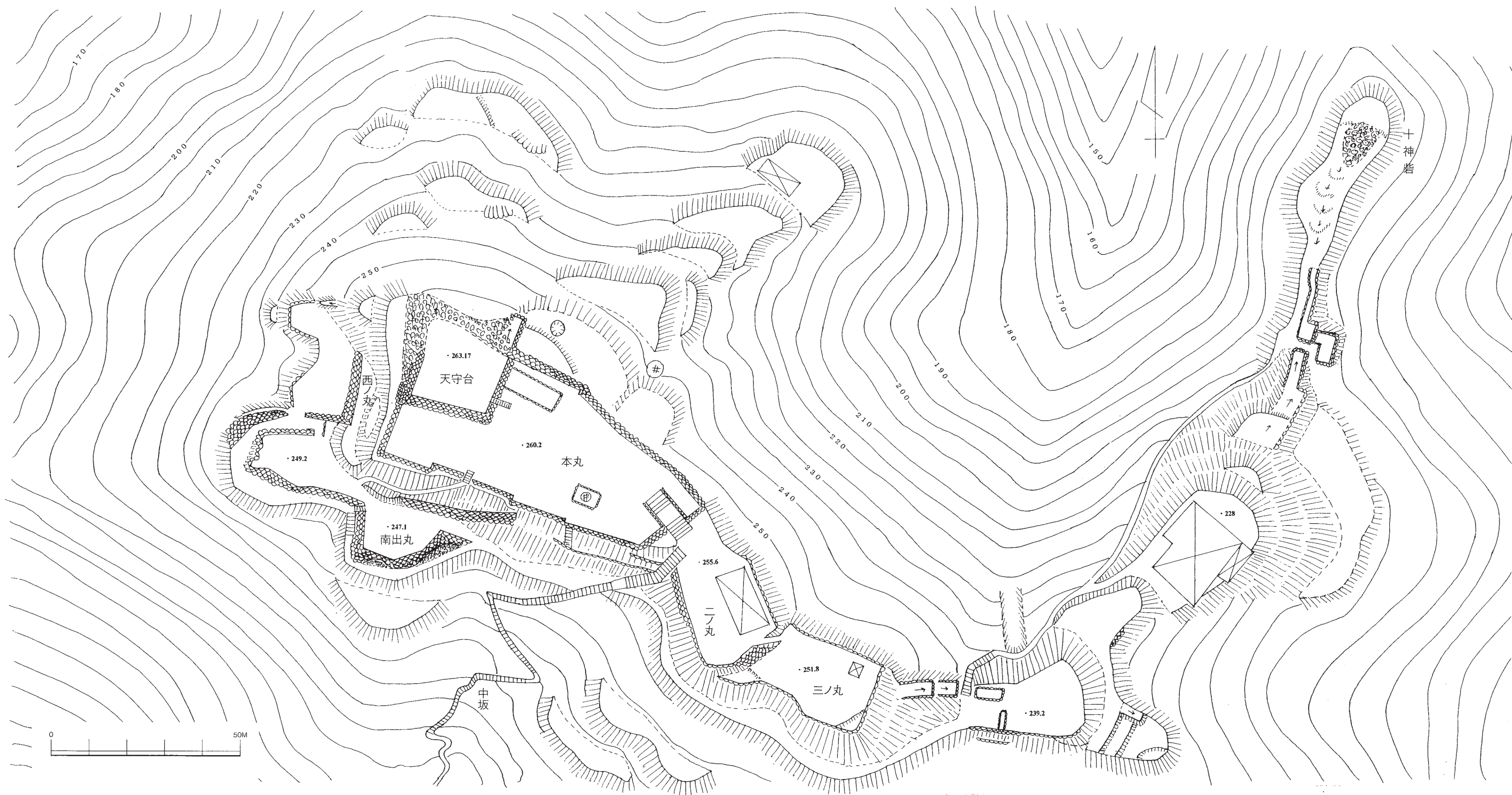
⑤「中坂」と本丸北側斜面の「段状遺構」（矢穴痕のみられる岩盤や石材を含む）の発見によって、鳥取城（「山上ノ丸」及び「山下の丸」）の石垣の石材が現地調達されたことが、初めて物的な証拠に基づいて解明できた。今後、矢穴痕の精緻な計測や「段状遺構（石取場）」の連絡道などの調査によって、その利用方法の解明が必要になる。

⑥中世鳥取城の特徴は、高い切岸をもつ広い曲輪を中心にして城砦群を形成し、その城砦群間の連絡を密にして防御する縄張りである。従って「山上ノ丸」域の曲輪群の防御的な求心性は乏しい。戦国期特有の堀切・堅堀・土塁・畝状堅堀などはほとんど構築されておらず、岩盤が露出したような険しい切岸によって防御しようとしている。

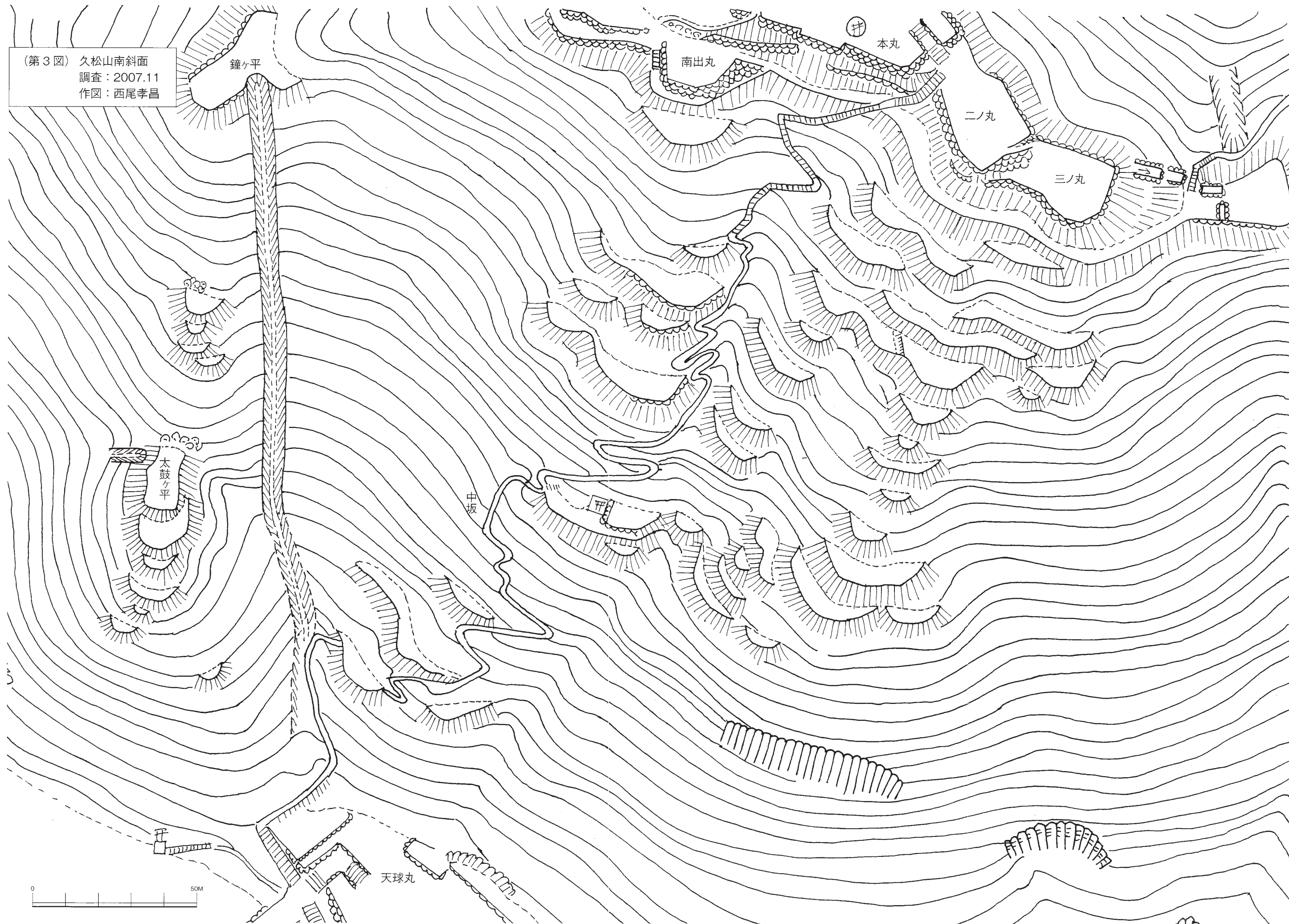
⑦久松山は城郭遺構だけでなく、寺院跡・神社跡・古墳・中世墓など様々な遺構が分布する「複合遺跡」である。城郭でも「村の城」・「守護の城」・「織豊勢力の陣城」・「高石垣をもつ近世大名の城」など、各種の城郭遺構が良好に遺存している。今後の調査によって、国史跡鳥取城跡の歴史的・文化的価値をより高めて行くことが肝要である。



(第2図) 鳥取城山上ノ丸
調査：2007.11
作図：西尾孝昌



(第3図) 久松山南斜面
調査：2007.11
作図：西尾孝昌



(第4図) 寺屋敷周辺
調査：2007.11
坂田・西尾
作図：西尾孝昌

